

文鳥

夏目漱石

青空文庫

十月早稲田わせだに移る。伽藍がらんのような書齋にただ一人、片づけた顔ほおづえを頬杖で支えていると、三重吉みえきちが来て、鳥を御飼かいなさいと云う。飼つてもいいと答えた。しかし念のためだから、何を飼うのかねと聞いたら、文鳥ぶんちょうですと云う返事であつた。

文鳥は三重吉の小説に出て来るくらいだから奇麗きれいな鳥に違なからうと思つて、じゃ買つてくれたまゑと頼んだ。ところが三重吉は是非御飼いなさいと、同じような事を繰り返している。うむ買うよ買うよとやはり頬杖を突いたまま、むにやむにや云つてるうちに三重吉は黙つてしまった。おおかた頬杖に愛想を尽かしたんだらうと、この時始めて気がついた。

すると三分ばかりして、今度は籠かごを御買いなさいと云いだした。これも宜よろしいと答えると、是非御買いなさいと念を押す代りに、鳥籠の講釈を始めた。その講釈はだいぶ込み入こったものであつたが、気の毒な事に、みんな忘れてしまった。ただ好いのは二十円ぐらいすると云う段になつて、急にそんな高価たかいのでもなくつても善よかろうと云つておいた。三重吉はにやにやしている。

それから全体どこで買うのかと聞いて見ると、なにどこの鳥屋にでもありますと、実に平凡な答をした。籠はと聞き返すと、籠ですか、籠はその何ですよ、なにどこにかあるでしょう、とまるで雲を攫つかむような寛大な事を云う。でも君あてがなくつちやいけなかりうと、あたかもいけないような顔をして見せたら、三重吉

は頬ほっぺたへ手をあてて、何でも駒込に籠かごの名人があるそうですが、年寄だそうですから、もう死んだかも知れませんが、非常に心細くなつてしまつた。

何しろ言いだしたものに責任を負わせるのは当然の事だから、さつそく万事を三重吉に依頼する事にした。すると、すぐ金を出せと云う。金はたしかに出した。三重吉はどこで買ったか、七子ななこの三つ折みつおれの紙入を懐中して、人の金でも自分の金でも悉しつぱい皆この紙入の中に入れる癖がある。自分は三重吉が五円札をたしかにこの紙入の底へ押し込んだのを目撃した。

かようにして金はたしかに三重吉の手に落ちた。しかし鳥と籠かごとは容易にやつて来ない。

そのうち秋が小春こはるになった。三重吉はたびたび来る。よく女の話をして帰つて行く。文鳥と籠の講釈は全く出ない。硝子戸ガラスドを透すかして五尺の縁側えんがわには日が好く当る。どうせ文鳥を飼うなら、こんな暖かい季節に、この縁側へ鳥籠を据すえてやったら、文鳥も定めし鳴き善よかろうと思ふくらいであつた。

三重吉の小説によると、文鳥は千代ちよ千代と鳴くそうである。その鳴き声がいぶん気に入つたと見えて、三重吉は千代千代を何度となく使っている。あるいは千代と云う女に惚ほれていた事があるのかも知れない。しかし当人はいつころそんな事を云わない。自分も聞いてみない。ただ縁側に日が善く当る。そうして文鳥が鳴かない。

そのうち霜しもが降り出した。自分は毎日伽藍がらんのような書齋に、寒い顔を片づけてみたり、取乱してみたり、頬杖を突いたりやめたりして暮くしていた。戸は二重にじゅうに締め切った。火鉢ひばちに炭ばかり継ついでいる。文鳥はついに忘れた。

ところへ三重吉が門かどぐち口から威勢よく這入はいつて来た。時は宵よいの口くちであつた。寒いから火鉢の上へ胸から上を翳かぎして、浮かぬ顔をわざとほてらしていたのが、急に陽気になつた。三重吉は豊ほうりゆ隆うを従したがっている。豊隆はいい迷惑である。二人が籠を一つずつ持つている。その上に三重吉が大きな箱を兄あにき分に抱かかえている。五円札が文鳥と籠と箱になつたのはこの初冬はつふゆの晩であつた。

三重吉は大得意である。まあ御覧なさいと云う。豊隆その洋灯ランプ

をもつとこつちへ出せなどと云う。そのくせ寒いので鼻の頭が少し紫むらさきいろ色になつている。

なるほど立派な籠ができた。台うしろしが漆で塗つてある。竹は細く削つた上に、色が染つけてある。それで三円だと云う。安いなあ豊隆と云つてゐる。豊隆はうん安いと云つてゐる。自分は安いか高いか判然と判わからないが、まあ安いなあと云つてゐる。好いものになると二十円もするそうですと云う。二十円はこれにへんめで二返目である。二十円に比べて安いのは無論である。

この漆はね、先生、日向ひなたへ出して曝さらしておくうちに黒味くろみが取れてだんだん朱しゆの色が出て来ますから、——そうしてこの竹は一返いっぺ善んく煮たんだから大丈夫ですよなどと、しきりに説明をして

くれる。何が大丈夫なのかねと聞き返すと、まあ鳥を御覧なさい、奇麗きれいでしようと言っている。

なるほど奇麗だ。次の間つぎへ籠まを据えて四尺ばかりこつちから見ると少しも動かない。薄暗い中に真白に見える。籠の中にうずくまっていなければ鳥とは思えないほど白い。何だか寒そうだ。

寒いだろうねと聞いてみると、そのために箱を作ったんだと云う。夜になればこの箱に入れてやるんだと云う。籠かごが二つあるのはどうするんだと聞くと、この粗末な方へ入れて時々行ぎようずい水をぎようずい使てわせるのだと云う。これは少し手数てすうが掛るなど思っていると、それから糞ふんをして籠かごを汚よごしますから、時々掃除そうじをしておやりなさいとつけ加えた。三重吉は文鳥のためにはなかなか強硬である。

それをはいはい引受けると、今度は三重吉が袂たもとから粟あわを一袋出した。これを毎朝食わせなくつちやいけません。もし餌えをかえてやらなければ、餌壺えつぼを出して殻からだけ吹いておやんなさい。そうしないと文鳥が実みのある粟を一々拾い出さなくつちやなりませんから。水も毎朝かえておやんなさい。先生は寝坊だからちようど好いでしようと大変文鳥に親切きんせつを極きわめている。そこで自分もよろしいと万事受合うけあった。ところへ豊隆が袂たもとから餌壺えつぼと水入すいじりを出して行儀ぎよよく自分の前に並べた。こういつさい万事を調ととのえておいて、実行せまを逼せまられると、義理にも文鳥の世話をしなければならなくなる。内心ではよほど覚おぼ束つかなかつたが、まずやってみようとまでは決心けしんした。もしできなければ家うちのものが、どうかするだろうと思つ

た。

やがて三重吉は鳥籠を叮嚀ていねいに箱の中へ入れて、縁側えんがわへ持ち出して、ここへ置きますからと云つて歸つた。自分は伽藍がらんのような書齋の真中に床を展のべて冷ひやかに寝た。夢に文鳥を背負しよい込んだ心持は、少し寒かつたが眠ねぶつてみれば不断ふだんの夜よるのごとく穏かである。

翌よくあさ朝眼あさめが覚さめると硝子戸ガラスどに日が射している。たちまち文鳥えをやらなければならぬと思つた。けれども起きるのが退儀たいぎであつた。今にやろう、今にやろうと考えているうちに、とうとう八時過すあしになつた。仕方がないから顔を洗うついでをもつて、冷たい縁すあしを素足すあしで踏みながら、箱の蓋ふたを取つて鳥籠あかるみを明海あかるみへ出し

た。文鳥は眼をぱちつかせている。もつと早く起きたかつたろう
と思つたら気の毒になつた。

文鳥の眼は真黒である。瞼まぶたの周囲まわりに細い淡紅色ときいろの絹糸を縫いつ
けたような筋すじが入っている。眼をぱちつかせるたびに絹糸が急に
寄つて一本になる。と思うとまた丸くなる。籠を箱から出すや否
や、文鳥は白い首をちよつと傾かたむけながらこの黒い眼を移して始め
て自分の顔を見た。そうしてちちと鳴いた。

自分は静かに鳥籠を箱の上に据すえた。文鳥はぱつと留とまり木ぎを離
れた。そうしてまた留り木に乗った。留り木は二本ある。黒味が
かつた青あお軸おしくをほどよき距離に橋と渡して横に並べた。その一本
を軽く踏まえた足を見るといかにも華き奢やしやにできている。細長い

薄^{うすくれない}紅^{こう}の端^{はし}に真珠^{しんじゆ}を削^{けず}つたような爪^{つめ}が着^きいて、手頃^{てぐら}な留^{とど}り木^ぎを甘^{うま}く抱^{かか}え込^こんでいる。すると、ひらりと眼^{まなこ}先^{さき}が動^{うご}いた。文鳥^{ぶんちう}はすでに留^{とど}り木^ぎの上^{うへ}で方向^{むき}を換^かえていた。しきりに首^{くび}を左^{ひだり}右^{みぎ}に傾^{かたむ}ける。傾^{かたむ}けかけた首^{くび}をふと持^もち直^{ただ}して、心持^{こころもち}前^{まへ}へ伸^のしたかと思^{おも}つたら、白^{しろ}い羽^は根^ねがまたちらりと動^{うご}いた。文鳥^{ぶんちう}の足^{あし}は向^{むか}うの留^{とど}り木^ぎの真中^{まんなか}あたり^{あたり}に具^ぐ合^あよく落^おちた。ちちと鳴^なく。そうして遠^{とほ}くから自^{みづか}分の顔^{かほ}を覗^{のぞ}き込^こんだ。

自分は顔^{かほ}を洗^{あら}いに風呂^{ふうろ}場^ばへ行^いつた。帰^{かへ}りに台所^{だいしよ}へ廻^{まわ}つて、戸^と棚^{だな}を明^あけて、昨^{けつ}夕^た三^{さん}重^{じゆう}吉^{きち}の買^かつて来^きてく^くれた粟^{あは}の袋^{ふくろ}を出^だして、餌^え壺^{つぼ}の中^{なか}へ餌^えを入^いれて、もう一つ^{ひとつ}には水^{みづ}を一^{いっ}杯^{ぱい}入^いれて、また書^{しよ}斎^{さい}の縁^{えん}側^{わき}へ出^でた。

三重吉は用意周到な男で、昨夕ゆうべ叮嚀ていねいに餌えをやる時の心得を説明して行つた。その説によると、むやみに籠の戸を明けると文鳥が逃げ出してしまふ。だから右の手で籠の戸を明けながら、左の手をその下へあてがって、外から出口を塞ふさぐようにしなくつては危険だ。餌壺えつぼを出す時も同じ心得でやらなければならぬ。とその手つきまでして見せたが、こう両方の手を使って、餌壺をどうして籠の中へ入れる事ができるのか、つい聞いておかなかつた。

自分はやむをえず餌壺を持ったまま手の甲で籠の戸をそろりと上へ押し上げた。同時に左の手で開あいた口をすぐ塞ふさいだ。鳥はちよつと振り返つた。そうして、ちちと鳴いた。自分は出口を塞いだ左の手の処置に窮した。人の隙すきを窺うかがつて逃げるような鳥とも見

えないので、何となく気の毒になった。三重吉は悪い事を教えた。大きな手をそろそろ籠の中へ入れた。すると文鳥は急に羽搏はばたきを始めた。細く削けずった竹の目から暖かいむく毛が、白く飛ぶほどつばさに翼を鳴らした。自分は急に自分の大きな手が厭いやになった。粟あわの壺と水の壺を留り木の間にようやく置くや否や、手を引き込ました。籠の戸ははたりと自然ひとりに落ちた。文鳥は留り木の上に戻った。白い首を半ば横なかに向けて、籠の外にいる自分を見上げた。それから曲げた首を真直まつすぐにして足の下もとにある粟と水を眺めた。自分自分は食事をしに茶の間へ行つた。

その頃は日課として小説を書いている時分であつた。飯と飯の間はたいてい机に向つて筆を握っていた。静かな時は自分で紙の

上を走るペンの音を聞く事ができた。伽藍がらんのような書齋へは誰も這入はいつて来ない習慣であつた。筆の音に淋さびしさと云う意味を感じた朝も昼も晩もあつた。しかし時々はこの筆の音がぴたりとやむ、またやめねばならぬ、折もだいぶあつた。その時は指の股またに筆を挟はさんだまま手の平ひらへ顎あごを載せて硝子ガラス越こに吹き荒れた庭を眺めるのが癖くせであつた。それが済むと載せた顎を一応つま撮まんで見る。それでも筆と紙がいつしよにならない時は、撮まんだ顎を二本の指で伸のして見る。すると縁えんがわ側で文鳥がたちまち千代ちよ千代と二声鳴いた。筆を擱おいて、そつと出て見ると、文鳥は自分の方を向いたまま、留とまり木ぎの上から、のめりそうに白い胸を突き出して、高く千代と云つた。三重吉が聞いたらさぞ喜ぶだろうと思ふほどな美いい声で

千代と云った。三重吉は今に馴なれると千代と鳴きますよ、きつと鳴きますよ、と受合つて歸つて行つた。

自分はまた籠かごの傍そばへしやがんだ。文鳥は膨ふくらんだ首を二三度豎た横よこに向け直した。やがて一ひと団かたまりの白い体がほいと留り木の上を抜け出した。と思うと奇麗きれいな足の爪が半分ほど餌壺えつぼの縁ふちから後へ出た。小指を掛けてもすぐ引ひつ繰くり返かえりそうな餌壺は釣つり鐘かねのように静かである。さすがに文鳥は軽いものだ。何だか淡あわ雪ゆきの精せいのような気がした。

文鳥はつと嘴くちばしを餌壺の真中に落した。そうして二三度左右に振つた。奇麗きれいに平ならして入れてあつた粟がはらはらと籠の底こぼに零れた。文鳥は嘴くちばしを上げた。咽喉のどの所で微かすかな音がする。また嘴を粟の真中

に落す。また微こな音がする。その音が面白おもしろい。静かに聴きいていると、丸まるくて細こまやかで、しかも非常すみに速はやかである。堇すみれほどな小さい人が、黄金こがねの槌つちで瑪瑙めのうの基石ごいしでもつづけ様に敲たたいているような気がする。

くちばし
嘴くちばしの色を見ると紫むらさきを薄まく混まぜた紅べにのようである。その紅がしだいに流ながれて、粟あわをつつく口くちさき尖あの辺あたりは白しろい。象牙ぞうげを半透明はんとうめいにした白しろさである。この嘴くちばしが粟あわの中なかへ這はい入いる時は非常すみに早はやい。左右さゆうに振まり蒔まく粟あわの珠たまも非常すみに軽かろそうだ。文鳥ぶんちうは身みを逆さかさまにしないばかりに尖とがった嘴くちばしを黄色きいろい粒つぶの中に刺さし込んで、膨ふくらんだ首くびを惜お気しげもなく右左みぎひだりへ振まる。籠かごの底そこに飛とび散ちる粟あわの数かずは幾粒いくつぶだか分わらない。それでも餌壺えつぼだけは寂せき然ぜんとして静しずかである。重おもいものであ

る。餌壺の直径は一寸五分ほどだと思う。

自分はそつと書齋へ帰つて淋しくペンを紙の上に走らしていた。縁側では文鳥がちちと鳴く。折々は千代千代とも鳴く。外では木枯が吹いていた。

夕方には文鳥が水を飲むところを見た。細い足を壺の縁へ懸けて、小さい口に受けた一雫を大事そうに、仰向いて呑み下している。この分では一杯の水が十日ぐらい続くだろうと思つてまた書齋へ帰つた。晩には箱へしまつてやつた。寝る時硝子戸から外を覗いたら、月が出て、霜が降つていた。文鳥は箱の中でことりともしなかつた。

明る日もまた気の毒な事に遅く起きて、箱から籠を出してやつ

たのは、やっぱり八時過ぎであつた。箱の中ではとうから目が覺めていたんだらう。それでも文鳥はいつこう不平らしい顔もしなかつた。籠が明るい所へ出るや否や、いきなり眼をしばたたいて、心持首をすくめて、自分の顔を見た。

昔むかし美しい女を知つていた。この女が机もたに凭もたれて何か考えているところを、後うしろから、そつと行つて、紫の帶おびあ上げの房ふさになつた先を、長く垂たらして、頸くびすじ筋の細いあたりを、上から撫なで廻まわしたら、女はものう氣げに後を向いた。その時女の眉まゆは心持八の字に寄つていた。それで眼尻と口元には笑が萌きざしていた。同時に恰かつこう好の好い頸を肩まですくめていた。文鳥が自分を見た時、自分はふとこの女の事を思い出した。この女は今嫁に行つた。自分が紫の帶上

でいたずらをしたのは縁談のきまつた二三日後である。

餌壺にはまだ粟が八分通り這入っている。しかし殻もだいぶ混つていた。水入には粟の殻が一面に浮いて、苛く濁つていた。易えてやらなければならない。また大きな手を籠の中へ入れた。非常に要心して入れたにもかかわらず、文鳥は白い翼を乱して騒いだ。小さい羽根が一本抜けても、自分は文鳥にすまないと思つた。殻は奇麗に吹いた。吹かれた殻は木枯がどこかへ持つて行つた。水も易えてやつた。水道の水だから大変冷たい。

その日は一日淋しいペンの音を聞いて暮した。その間には折々千代千代と云う声も聞えた。文鳥も淋しいから鳴くのではなからうかと考えた。しかし縁側へ出て見ると、二本の留り木の間を、

あちらへ飛んだり、こちらへ飛んだり、絶間なく行きつ戻りつしている。少しも不平らしい様子はなかつた。

夜は箱へ入れた。明る朝目が覚めると、外は白い霜だ。文鳥も

眼が覚めているだろうが、なかなか起きる気にならない。枕元にある新聞を手取るさえ難儀だ。それでも煙草は一本ふかした。

この一本をふかしてしまつたら、起きて籠から出してやろうと思いなから、口から出る煙の行方を見つめていた。するとこの煙の中

に、首をすくめた、眼を細くした、しかも心持眉を寄せた昔の

女の顔がちよつと見えた。自分は床の上に起き直つた。寝巻の上へ羽織を引掛けて、すぐ縁側へ出た。そうして箱の蓋をはずして、

文鳥を出した。文鳥は箱から出ながら千代千代と二声鳴いた。

三重吉の説によると、馴なれるにしたがつて、文鳥が人の顔を見て鳴くようになるんだそうだ。現に三重吉の飼っていた文鳥は、三重吉が傍そばにいさえすれば、しきりに千代千代と鳴きつづけたそうだ。のみならず三重吉の指の先から餌えを食べると云う。自分もいつか指の先で餌をやつて見たいと思つた。

次の朝はまた怠なまけた。昔の女の顔もつい思い出さなかつた。顔を洗つて、食事を済まして、始めて、気がついたように縁側えんがわへ出て見ると、いつの間にか籠が箱の上に乗っている。文鳥はもう留とまり木の上を面白おもしろそうにあちら、こちらと飛び移っている。そうして時々は首を伸のして籠の外を下の方から覗のぞいている。その様子がなかなか無邪気である。昔紫の帯上おびあげでいたずらをした女は襟えりの

長い、背のすらりとした、ちよつと首を曲げて人を見る癖があつた。

粟あわはまだある。水もまだある。文鳥は満足している。自分は粟も水も易かえずに書齋へ引ひっこ込んだ。

昼過ぎまた縁側へ出た。食後の運動かたがた、五六間の廻り縁を、あるきながら書見するつもりであつた。ところが出て見ると粟がもう七分がた尽きている。水も全く濁にごってしまった。書物を縁側へ抛ほうり出しておいて、急いで餌えと水を易かえてやった。

次の日もまた遅く起きた。しかも顔を洗つて飯を食うまでは縁側を覗のぞかなかつた。書齋に帰つてから、あるいは昨日きのうのように、家うちのもの人が籠を出しておきはせぬかと、ちよつと縁へ顔だけ出し

て見たら、はたして出してあつた。その上餌も水も新しくなつていた。自分はやっと安心して首を書斎に入れた。途端とたんに文鳥は千代千代と鳴いた。それで引込ひっこめた首をまた出して見た。けれども文鳥は再び鳴かなかつた。げげんな顔をして硝子越ガラスこしに庭の霜しもを眺めていた。自分はとうとう机の前に歸つた。

書斎の中では相変らずペンの音がさらさらする。書きかけた小説はだいぶんはかどつた。指の先が冷たい。今朝埋いけた佐倉炭さくらずみは白くなつて、薩摩五徳さつまごたくに懸かけた鉄瓶てつびんがほとんど冷さめている。炭取は空からだ。手を敲たたいたがちよつと台所まで聴きこえない。立つて戸を明けると、文鳥は例に似にず留とまり木ぎの上にじつと留とまっている。よく見ると足が一本しかない。自分は炭取を縁えりに置いて、上からこ

ごんで籠の中を覗き込んだ。いくら見ても足は一本しかない。文鳥はこの華奢きやしやな一本の細い足に総身そうみを託して黙然もくねんとして、籠の中に片づいている。

自分は不思議に思った。文鳥について万事を説明した三重吉もこの事だけは抜いたと見える。自分が炭取に炭を入れて帰った時、文鳥の足はまだ一本であった。しばらく寒い縁側に立って眺めていたが、文鳥は動く気色けしきもない。音を立てないで見つめていると、文鳥は丸い眼をしないで細くし出した。おおかた眠ねむたいのだろうと思つて、そつと書斎へ這入ろうとして、一步足を動かすや否や、文鳥はまた眼を開いたあ。同時に真白な胸の中から細い足を一本出した。自分は戸を閉ためて火鉢ひばちへ炭をついだ。

小説はしだいに忙いそがしくなる。朝は依然として寝坊をする。一度家うちのものが文鳥の世話をしてくれてから、何だか自分の責任が軽くなつたような心持がする。家うちのものが忘れる時は、自分が餌えをやる水をやる。籠かごの出し入れをする。しない時は、家うちのものを呼んでさせる事もある。自分はただ文鳥の声を聞くだけが役目のようになつた。

それでも縁えんがわ側へ出る時は、必ず籠の前へ立たちどま留どまつて文鳥の様子を見た。たいていは狭い籠を苦くにもしないで、二本の留り木を満足そうに往復していた。天気の良い時は薄い日を硝子ガラスごし越こに浴びて、しきりに鳴き立てていた。しかし三重吉の云つたように、自分の顔を見てことさらに鳴く気色はさらになかつた。

自分の指からじかに餌えを食うなどと云う事は無論なかつた。折々きげん機嫌のいい時は麵麩パンの粉こなどを人指指ひとさしゆびの先へつけて竹の間からちよつと出して見る事があるが文鳥はけつして近づかない。少し無遠慮に突き込んで見ると、文鳥は指の太いのに驚いて白い翼つばさを乱して籠の中を騒ぎ廻るのみであつた。二三度試みた後のち、自分は氣の毒になつて、この芸だけは永久に断念してしまつた。今の世にこんな事のできるものがあるかどうかはなはだ疑わしい。おそらく古代の聖徒せいんとの仕事だろう。三重吉は嘘うそを吐いたに違ない。

或日の事、書齋で例のごとくペンの音を立てて侘わびしい事を書き連ねつらていると、ふと妙な音が耳に這入はいつた。縁側でさらさら、

さらさら云う。女が長い衣きぬの裾すそを捌さばいているようにも受取られるが、ただの女のそれとしては、あまりに仰ぎょう山さんである。雛段ひなだんをあるく、内裏だいりびな雛ひなの袴はかまの襷ひだの擦すれる音とでも形容したらよかろうと思つた。自分は書きかけた小説をよそにして、ペンを持つたまま縁側へ出て見た。すると文鳥ぶんちうが行ぎやう水ずいを使つていた。

水はちようど易かえ立たてであつた。文鳥は軽い足を水入の真中に胸毛むなげまで浸ひたして、時々は白い翼つばさを左右にひろげながら、心持水入の中にしやがむように腹を圧おしつけつつ、総身そうみの毛を一度に振ふつている。そうして水入の縁ふちにひよいと飛び上る。しばらくしてまた飛び込む。水入の直径は一寸五分ぐらいに過ぎない。飛び込んだ時は尾も余り、頭も余り、背は無論余る。水に浸つかるのは足と

胸だけである。それでも文鳥は欣然きんぜんとして行ぎょう水ずいを使つてい
る。

自分は急に易籠かえかごを取つて来た。そうして文鳥をこの方へ移し
た。それから如露じよろを持つて風呂場へ行つて、水道の水を汲くんで、
籠の上からさあさあとかけてやった。如露じよろの水が尽きる頃には白
い羽根から落ちる水が珠たまになつて転ころがった。文鳥は絶えず眼をぱ
ちぱちさせていた。

昔紫の帶上おびあげでいたずらをした女が、座敷で仕事をしていた時、
裏二階から懐ふところ中鏡かがみで女の顔へ春の光線を反射させて楽しんだ
事がある。女は薄紅うすあかくなつた頬を上げて、織ほそい手を額の前に翳かざし
ながら、不思議そうに瞬まばたきをした。この女とこの文鳥とはおそらく

同じ心持だろう。

日数ひかずが立つにしたがつて文鳥は善くよ囀さえずずる。しかしよく忘れられる。或る時は餌壺えつぼが粟あわの殻からだけになつていた事がある。ある時は籠かごの底が糞ふんでいっぱいになつていた事がある。ある晩宴会があつて遅く帰つたら、冬の月が硝子越ガラスごしに差し込んで、広い縁側えんがわがほの明るく見えるなかに、鳥籠がしんとして、箱の上に乗つていた。その隅すみに文鳥の体が薄白く浮いたまま留とまり木ぎの上に、有るか無きかに思われた。自分は外套がいとうの羽根はねを返して、すぐ鳥籠を箱のなかへ入れてやつた。

翌日文鳥は例のごとく元気よく囀さえずっていた。それから時々寒よるい夜も箱にしまつてやるのを忘れることがあつた。ある晩いつも

の通り書齋で専念にペンの音を聞いていると、突然縁側の方でがたりと物の覆くつがえつた音がした。しかし自分は立たなかつた。依然として急ぐ小説を書いていた。わざわざ立つて行って、何でもないといいまいましたいから、気にかからないではなかつたが、やはりちよつと聞ききみ耳を立てたまま知らぬ顔ですましていた。その晩寝たのは十二時過ぎであつた。便所に行つたついで、気がかりだから、念のため一応縁側へ廻つて見ると――

籠は箱の上から落ちてゐる。そうして横に倒れてゐる。水入みずいれも餌壺えつぼも引繰返ひっくりかえつてゐる。粟あわは一面に縁側に散らばつてゐる。留り木は抜け出している。文鳥はしのびやかに鳥籠さんの棧さんにかじりついてゐた。自分は明日あしたから誓つてこの縁側に猫を入れまいと決

心した。

翌あくるひ日 文鳥は鳴かなかった。粟を山やまもり盛入れてやった。水を漲みなぎ

るほど入れてやった。文鳥は一本足のまま長らく留り木の上を動か
なかつた。午飯ひるめしを食つてから、三重吉に手紙を書こうと思つ

て、二三行書き出すと、文鳥がちちと鳴いた。自分は手紙の筆を
留めた。文鳥がまたちちと鳴いた。出て見たら粟も水もだいぶん
減つている。手紙はそれぎりにして裂いて捨てた。

翌日よくじつ 文鳥がまた鳴かなくなつた。留り木を下りて籠の底へ腹を
圧おしつけていた。胸の所が少し膨ふくらんで、小さい毛さげなみが漣なみのよう
に乱れて見えた。自分はこの朝、三重吉から例の件で某所まで来て
くれと云う手紙を受取つた。十時までにと云う依頼であるから、

文鳥をそのままにしておいて出た。三重吉に逢つて見ると例の件がいろいろ長くなつて、いつしよに午飯を食う。いつしよに晩飯ばんめを食う。その上明日あすの会合まで約束して宅うちへ歸つた。歸つたのは夜の九時頃である。文鳥の事はすっかり忘れていた。疲れたから、すぐ床へ這入はいつて寝てしまった。

翌あくるひ日眼が覚さめるや否や、すぐ例の件を思いだした。いくら当人が承知だつて、そんな所へ嫁にやるのは行ゆくすえ末よくあるまい、まだ子供だからどこへでも行けと云われる所へ行く気になるんだらう。いったん行けばむやみに出られるものじゃない。世の中には満足しながら不幸おちいに陥おちいつて行く者がたくさんある。などと考へて楊枝ようじを使つて、朝飯を済ましてまた例の件を片づけに出掛けて

行つた。

歸つたのは午後三時頃である。玄関へ外套がいたうを懸かけて廊下伝いに書齋へ這入はいるつもりで例の縁側へ出て見ると、鳥籠が箱の上に出してあつた。けれども文鳥は籠の底に反そつ繰くり返かえつていた。二本の足を硬そろく揃そえて、胴と直線に伸ばしていた。自分は籠の傍わきに立つて、じつと文鳥を見守つた。黒い眼を眠ねぶつている。瞼まぶたの色は薄うす蒼あおく變つた。

餌壺えつぼには粟あわの殻からばかり溜たまつている。啄ついばむべきは一粒もない。水入は底の光るほど溷かれている。西へ廻つた日が硝子戸ガラスどを洩やれて斜めに籠に落ちかかる。台に塗うるしつた漆は、三重吉の云つたごとく、いつの間にか黒味が脱ぬけて、朱しゆの色が出て来た。

自分は冬の日に色づいた朱の台を眺めた。空からになった餌壺を眺めた。空しく橋を渡している二本の留り木を眺めた。そうしてその下に横よこたわる硬い文鳥を眺めた。

自分はこごんで両手に鳥籠を抱かかえた。そうして、書斎へ持つて這入はいった。十畳の真中へ鳥籠を卸おろして、その前へかしまつて、籠の戸を開いて、大きな手を入れて、文鳥を握やわらつて見た。柔かい羽根は冷ひえきつている。

拳こぶしを籠から引き出して、握こぶった手を開けると、文鳥は静てのひらに掌の上にある。自分は手を開けたまま、しばらく死んだ鳥を見つめていた。それから、そつと座布ざぶとん団の上に卸おろした。そうして、烈はげしく手を鳴らした。

十六になる小女こおんなが、はいと云つて敷居際しきいぎわに手をつかえる。

自分はいきなり布団の上にある文鳥を握つて、小女の前へ抛ほうり出した。小女は俯向うつむいて畳を眺めたまま黙っている。自分は、餌えをやらないから、とうとう死んでしまったと云いながら、下女の顔を睥にらめつけた。下女はそれでも黙っている。

自分は机の方へ向き直つた。そうして三重吉へ端書はがきをかけた。

「家うちのもの人が餌をやらないものだから、文鳥はとうとう死んでしまつた。たのみもせぬものを籠へ入れて、しかも餌をやる義務さえ尽くさないのは残酷の至りだ」と云う文句であつた。

自分は、これを投函だして来い、そうしてその鳥をそつちへ持つて行けと下女に云つた。下女は、どこへ持つて参りますかと聞き

返した。どこへでも勝手に持つて行けと怒鳴りつけたら、驚いて台所の方へ持つて行つた。

しばらくすると裏庭で、子供が文鳥を埋るんだ埋るんだと騒いでいる。庭掃除に頼んだ植木屋が、御嬢さん、ここいらが好いでしようと言つてゐる。自分は進まぬながら、書齋でペンを動かしてゐた。

翌日は何だか頭が重いので、十時頃になつてようやく起きた。顔を洗いながら裏庭を見ると、昨日植木屋の声のしたあたりに、小さい公札が、蒼い木賊の一株と並んで立つてゐる。高さは木賊よりもずつと低い。庭下駄を穿いて、日影の霜を踏み砕いて、近づいて見ると、公札の表には、この土手登るべからずとあつた。

筆子ふでこの手蹟である。

午後三重吉から返事が来た。文鳥は可愛想かわいそうな事を致しましたとあるばかりで家うちのもの人が悪いとも残酷だともいつこう書いてなかつた。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：大野晋

1999年5月12日公開

2011年3月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

文鳥

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>